



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

日常の、ありふれた生活の中にこそ

草津出身で、若手声楽家として活躍されているKさんが、小さい頃の心に残る思い出話を語られた。彼女の母親も声楽家として著名であり、かつては小学校のPTA役員として、また、我が子も含めた子ども達への合唱の指導者としても活躍されていただけに、彼女が小さい頃から受けてきた、音楽にかかわる英才教育の話が聞けるものと期待して耳を傾けた。ところが、何のことはない、本人の口からは、給食で出されたイチゴジャムのパンがおいしかったとか、先生といっしょに遊んだこととかが、一番の思い出となっていると語られたのである。私としては、子どもの頃の思い出話が、音楽に関わる英才教育でないところに驚きもしたが、逆にそれが新鮮でもあった。彼女の話聞きながら、どんなに凄い人でも、小さい頃は他の子と同様、ごく普通の体験をし、喜んだり悲しんだりしたのが日常だったのだと合点がいったのである。

本人にとっては、音楽というものは小さい頃からあたりまえの環境であり、とりたててあれこれ無理強いされたものではなかったようだ。そんな中で、給食で出されたイチゴジャムのパンとの出会いは、みんなといっしょになって「おいしい、おいしい」とニコニコ顔で味わった体験であったのだろう。そしてまた、先生とたのしいお話をし、友だちと一緒に遊んだことが、幼少期の誰にでもありそうな、それでいてその詳細は彼女にしか体験されなかった格別のものとして、大切にしまわれていたのである。

物理学者の湯川秀樹が記した自叙伝には、自身の顔つきにまつわる幼少期のエピソードが紹介されている。本人としては、自分は目つきが悪く、人相がよくないと卑下していたらしい。ある時、叔父に「この子はなかなか目つきが鋭い、将来偉くなるんじゃないか」と言われたものの、ありがたくも何とも思えなかったという。さらに小学校時代の思い出としては、学芸会でステージに上がったものの、セリフが思い出せず、結局外へ飛び出し、校庭の片隅の水たまりにいる、たくさんのオタマジャクシを見ていたという。内気な湯川少年のほろ苦い体験である。

注目したいのは、先のおいしい、楽しい体験も、後者の何とも言えないほろ苦い体験も、ずっと自分らしくいようとした中での格別の体験として、自身の記憶に刻まれていることだ。

大人は、子どもの将来に期待し、あれこれ策を練ることがある。しかしながら、願っていたとおりの結果が得られるとは限らない。何でもない日常の、ありふれた生活の中にこそ、本人にしか味わえない体験があり、その後の生きる姿勢を形作っていく。ゆったりとした姿勢で子どもの一日、一日を見守りたい。

校長 大林 道範